

鬼虎川遺跡第54次発掘調査報告



2004年3月
財団法人東大阪市文化財協会

表紙写真

調査区北端部で、弥生時代の堆積層を掘削している状況。(南西から)

鬼虎川遺跡第54次発掘調査報告

2004年3月

財団法人東大阪市文化財協会

例言

1. 本書は電気施設設置に伴う鬼虎川遺跡第54次発掘調査の報告書である。
2. 本調査は関西電力株式会社大阪南支店の委託を受けて財団法人東大阪市文化財協会が実施した。発掘調査に伴う工事は関西電力株式会社大阪南支店から発注され株式会社きんでんが行った。
3. 現地調査と整理は金村浩一を担当者とし、事務局体制等は次の通りである(2004年3月現在)。

理事長	西岡 晃(東大阪市教育委員会教育長)
常務理事	石賀秀作
事務局長	菰池隆(東大阪市教育委員会社会教育部次長)
調査部長	同上(兼務)
庶務部長	同上(兼務)
庶務主任	上野節子
庶務部員	朝田直美 大林亨
調査補助	組島慎也 武田慎平
4. 調査における上色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修財團法人日本色彩研究所色票監修「新版標準十色帖」に準じた。
5. 遺構実測は建設省告示による国土座標第VI系を使用し、水準高はT.P.値を用いた。
6. 本書の編集と執筆は金村が行った。
7. 本調査の経費はすべて関西電力株式会社大阪南支店のご負担によるものである。調査に御理解と御協力をいただき、深く謝意を表したい。
8. 現地調査は株式会社きんでん、安西工業株式会社他の諸氏による協力によって円滑に進行した。記して謝意を表したい。

目次

例言		
日次		
第1章	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第2章	層序の概略・・・・・・・・・・・・	3
第3章	遺構・・・・・・・・・・・・	7
第4章	おわりに・・・・・・・・・・・・	13
注		
文献		
報告書抄録		

第1章 はじめに

鬼虎川遺跡は東大阪市西石切町・弥生町・宝町他にひろがる縄文時代から現代に至る複合遺跡である。遺跡は生駒山西麓の沖積扇状地の扇端部(現地表面約T.P.+7m)から河内平野の沖積低地(同約T.P.+5m)に位置する。これまでの発掘調査によって弥生時代の建物や墓等が多数発見され、近畿地方でも有数の弥生時代集落遺跡とされている。通常では約2000年という長い間に腐食して痕跡すら残らない木製・骨製の遺物がこの遺跡では原形を保ったまま出土する例が多いことも学界では名高い(注1)。

今回、東大阪市西石切町5丁目289~523番地(国道170号線歩道上他)において電気施設の設置が関西電力株式会社大阪南支店によって計画された。計画地が鬼虎川遺跡の範囲内に位置するため、東大阪市教育委員会文化財課によって発掘調査の必要が指示された。関係機関の協議の結果、財団法人東大阪市文化財協会が発掘調査を実施することになった。

鬼虎川遺跡の調査は遺跡北部を横断する国道308号線内で鉄道や高速道路建設に伴って実施されたものが多く、国道308号線以北で行われたものは少なかった。しかし、近年に一般国道170号線西石切立体交差事業に伴う調査が行われ、この地域は弥生時代の遺構や遺物が少なく、古墳時代から現代に至るまで主に耕作地として利用されてきたらしいことが判明している。今回の調査地はこの地域に位置する。

調査地の東は公共下水道管渠築造工事に伴う鬼虎川遺跡第51次発掘調査地が重複し(注2)、北は一般国道170号線西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第52次発掘調査地が重複している(注3)。

調査は現地表面下約2mまでを機械によって掘削し、現地表面下約5mまでを人力によって掘削しつつ



図1 調査地遠景(北から)

道路は国道170号線。左の白い塗に囲まれた箇所が調査地点。

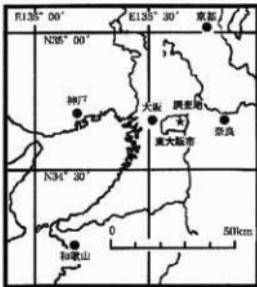


図2 東大阪市及び調査地位置図(S=1:200,000)

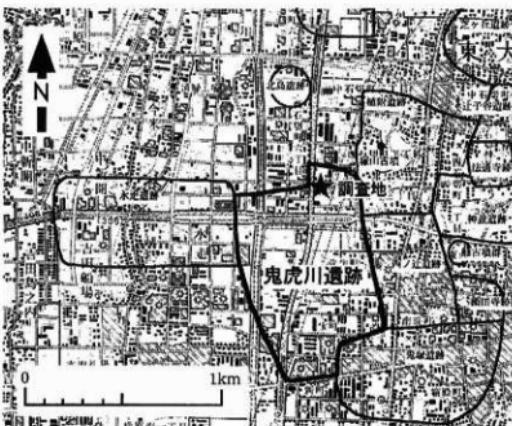


図3 調査地及び周辺遺跡位置図(S=1:25,000)

次数	事業名等	調査地	調査期間	面積(m ²)	調査主体
1次	萬代ガス導管埋設に伴う	西石切町5丁目8	1975.05.10 ~ 1975.06.21	16	東大阪市道路保護調査会
8次	車載示場建設に伴う	西石切町5丁目	1977.04.06 ~ 1977.04.21	50	東大阪市道路保護調査会
22次	国道308号線等建設に伴う	西石切町5丁目	1984.01.20 ~ 1984.05.30	309.9	大阪府教育委員会
37次	国道170号線西石切公休交差事業に伴う	西石切町5丁目	1994.02.22 ~ 1994.03.31	30	財) 東大阪市文化財基金
38次	歩道橋敷設に伴う	西石切町4丁目3-24	1994.12.19 ~ 1995.03.28	150	財) 東大阪市文化財協会
41次	共用住宅建設に伴う	西石切町5丁目181-1・2	1996.07.22 ~ 1996.10.03	325	財) 東大阪市文化財協会
42次	歩道橋敷設に伴う	西石切町5丁目523	1997.10.16 ~ 1997.12.09	178.21	財) 東大阪市文化財協会
43次	绿化施設に伴う	西石切町5丁目7-36	1998.06.15 ~ 1998.07.03	44	財) 東大阪市文化財基金
49次	国道170号線西石切立体交差事業に伴う	西石切町5丁目191-1他	1999.07.30 ~ 2000.03.30	396	東大阪市教育委員会
51次	下水道渠化造成に伴う	西石切町5丁目	2000.01.06 ~ 2000.01.31	39	東大阪市教育委員会
52次	国道170号線西石切立体交差事業に伴う	西石切町5丁目280・7丁目286他	2000.05.10 ~ 2001.05.23	1150	東大阪市教育委員会

表1 国道308号線以北の鬼虎川遺跡発掘調査一覧表

各調査の文献は本書末尾の文献の項に掲載した。

第37次発掘調査は試掘調査の性格もあり報告書は未刊行である。

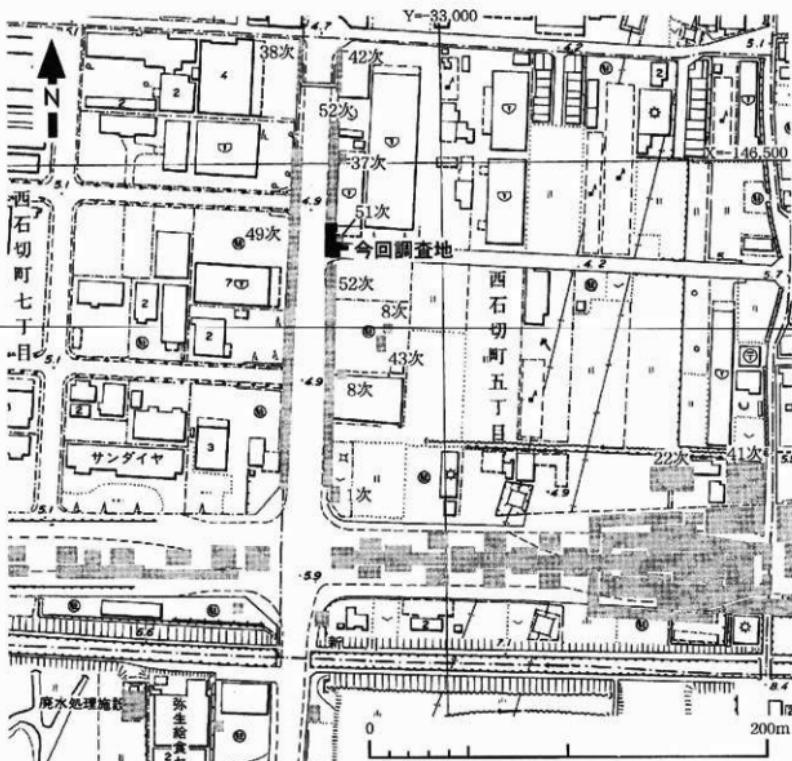


図4 調査地及び周辺既調査地位置図(S=1:2,500)

遺構や遺物の検出作業等を行う計画であった。機械掘削は夜間に行われ、職員(松田順一郎)が立ち会い、層序の観察を行った。調査は銅矢板打設等の土留め工事を施して実施している。発掘調査に伴う工事は関西電力株式会社大阪南支店から発注され株式会社きんでんが行った。また、調査区の大半が現道路に位置するため、ほとんどが覆鋼板に覆われたものとなつた。

調査における土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じた。遺構実測は建設省告示による国土座標第VI系を使用し、水準高はT.P.値を用いた。基準点の移設は株式会社サンヨーに委託している。現場調査・整理調査補助員として武田慎平と組島慎也が従事した。現場調査は2002(平成14)年5月30日から7月17日まで行い、調査面積は約98m²である。

調査の結果、江戸時代から現代に至る溝や平安時代頃の土壌、弥生土器等を検出し、整理箱(外寸386mm×59mm×155mm)に3箱の土器類(復元した状態を含む)、20箱の木器類、若干の骨器・金属製品・種子等を得た。木器の一部は財團法人元興寺文化財研究所に保存処理を委託し、加工の施されていない木の多くは投棄している。出土遺物には遺跡の略称、次数、登録番号を記した(例:KTR54R001)。

今回の調査によって鬼虎川遺跡北部の様相を知る貴重な資料を得ることができた。以下に調査の結果を報告する。なお、本調査の経費はすべて関西電力株式会社大阪南支店のご負担によるものである。調査に御理解と御協力をいただき、深く謝意を表したい。

第2章 層序の概略

すでに述べたように今回の調査では現地表面から約2~5m下までの堆積層を観察することができた。以下に、52次第4工区の層序(注4)と対比させつつ、下位から順に層序の概略を述べる(図5~12)。

第I層(図8-1~2)

2層に分層した。下部(図8-1)はオリーブ灰色細砂~



図5 西壁北部土層上部(東から)

最も下の黒色層は第II層。右上方は溝1の上部。



図6 西壁北端土層下部(東から)

黒色層は第II層。柱状のものは52次の矢板痕跡。それより右(北)は搅乱(52次4工区の調査区)。

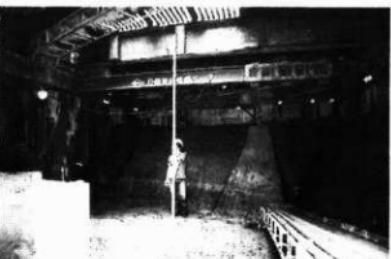


図7 南壁土層(北から)

第I層上面まで掘削した状況。黒色の第II層などが右(東)へ向かって低くなる。人物が持つ箱尺の上はスリットの入った覆鋼板。

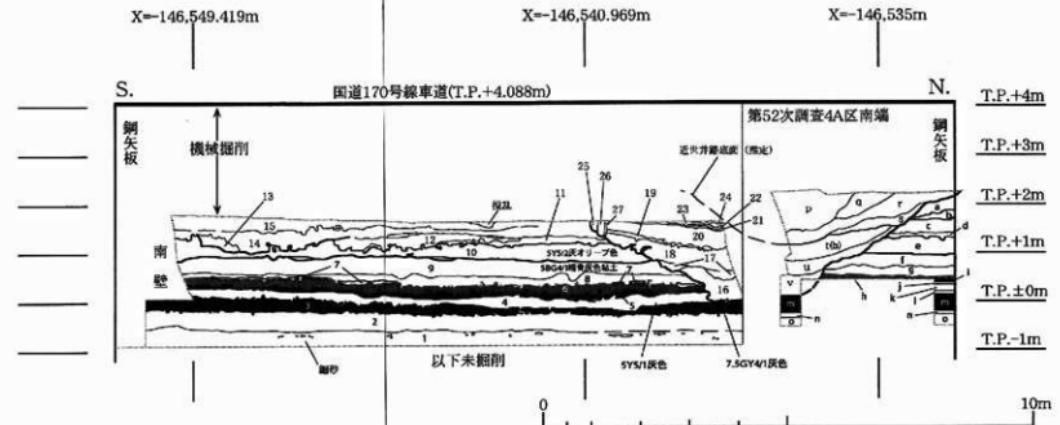


図8 西壁土層図(S=1:100)

シルト層、上部は(図8-2)オリーブ灰色シルト層。52次第4工区の第12層に相当する。遺物は出土しなかった。下湯が後退した後の河川等の流水による堆積層と考えられる。

第II層(図8-3)

黒色粘土層。植物遺体が腐食し粘土となったもの。腐りきらない植物遺体を多量に含む。52次第4工区の第11層に相当する。上面と層中、下面から弥生土器片(図11)や木器(図12)、柄状木器(図13)などが出土した。木器(図11)は板の一部と思われ、多数の細かい切りつけたような痕跡が観察される。一部は炭化している。柄状木器(図13)は先端を欠き、全体の形状は不明で、下端に加工を施し握り部を作るものである。また、上面と下面には地震による変形構造と思われる凸凹が見られる。本層は縄文時代晩期から弥生時代前期に堆積したと考えられる。

第III層(図8-4)

オリーブ灰色シルト～極細粒砂と薄い植物遺体層が水平に縞状の互層をなす。52次第4工区の第10A層・第10B層・第10C層に相当する。遺物は出土しなかった。流水による堆積層と考えられる。

第IV層(図8-5)

黒色粘土層。植物遺体が腐食し粘土となったもの。第II層よりも腐りきらない植物遺体を大量に含み、一部は腐植土状を呈する。52次第4工区の第9層に相当する。遺物は出土しなかった。本層は弥生時代後期から古墳時代前期に堆積したと考えられる。

第V層(図8-6)

暗灰色粘土層。52次第4工区の第8層に相当する。本層からは若干の弥生土器細片が出土した。上面と下面には地震による変形構造と思われる凸凹が見られる。本層は古墳時代から平安時代前半頃に堆積したと考えられる。

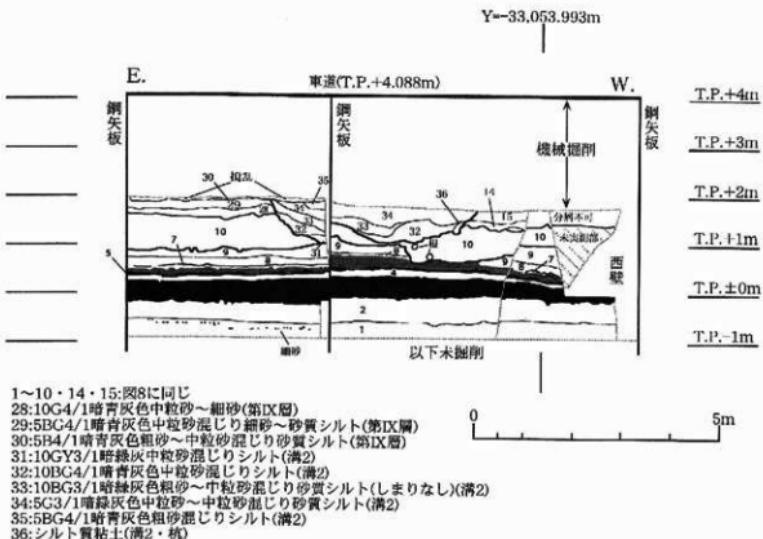


図9 南壁土層図(S=1:100)



図10 北端部第II層中遺物出土状況(南西から)

第I層上面まで掘削した状況。右の太いものは加工痕がみられないが一部が炭化していた木。その左の土器と重なるものが柄状木器(図13)。その左の木には加工痕がみられなかった。ここに写る土器はすべて1個に接合できた(右図11)。第II層上面のものも第I層上面に近い位置のものも接合できたことは興味深い。



図11 北端部第II層出土土器(S=1:4)

左の写真(図11)に写る弥生土器。2個にわかれているが、1個体の体部片。外面には篦みがきが明瞭に残り、煤が付着している。今回の調査で出土した弥生土器片の中では最も大きい破片。残存高約22.7cm。

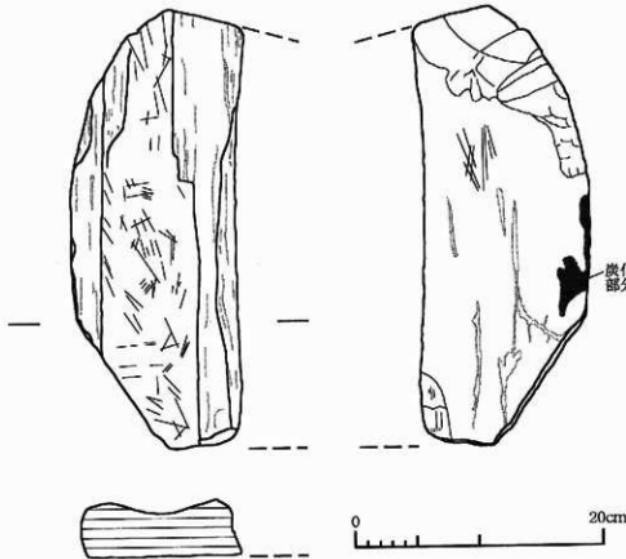


図12 第II層出土木器(S=1:4) 板の一部と思われる。

第VI層(図8-7)
明緑灰色細砂層。
遺物は出土しなかつた。

第VII層(図8-8～9)
2層に分層した。
下部(図8-8)は青灰色中粒砂～細砂層、
上部は(図8-9)青灰色中粒砂～細砂層。
それぞれ52次第4工区の第7層、第6層
に相当する。調査区北部では、その層境
は不明瞭で、粘土に
変質する。本層から
は若干の弥生土器細
片が出土した。流水
による堆積層と考え
られる。本層は平安

時代後半頃に堆積したと考えられる。

第VIII層(図8-10)

にぶい黄色シルト混じり粘土層。52次第4工区の第5A層に相当する。遺物は出土しなかった。下面で土壙を検出した。本層は鎌倉時代頃に堆積したと考えられる。

第IX層(図8-11～15・図9-28～30)

数層に分層したが、照明の不具合等から詳細な状況を把握できなかった。52次第4工区の第4A層・第4B層に相当する。遺物は出土しなかった。層中で溝らしき遺構を確認した。本層は鎌倉時代末から室町時代初め頃に堆積したと考えられる。

第3章 遺構

3.1 第VIII層下面の遺構(図14～21)

第VIII層下面で2基の土坑と1条の溝を検出した。土坑とした遺構が溝である可能性もあるが、この項では土坑として記述する。

土坑1は51次で検出された落ち込みの跡と思われる。座標に沿う方位をとり、平面は東西約2.2mを測る長方形を呈する。南北は8.6m前後を測ると思われる。断面は台形を呈し、深さ約60cmを測る(注5)。

南に隣接する土坑2は大半が調査区外となる。土坑1と同様の方位をとり、形状を呈する。南北2.3m以上、東西約2.6m、深さ約60cmを測る。

ともに底から上へ15cm前後まではベースとなる第VIII

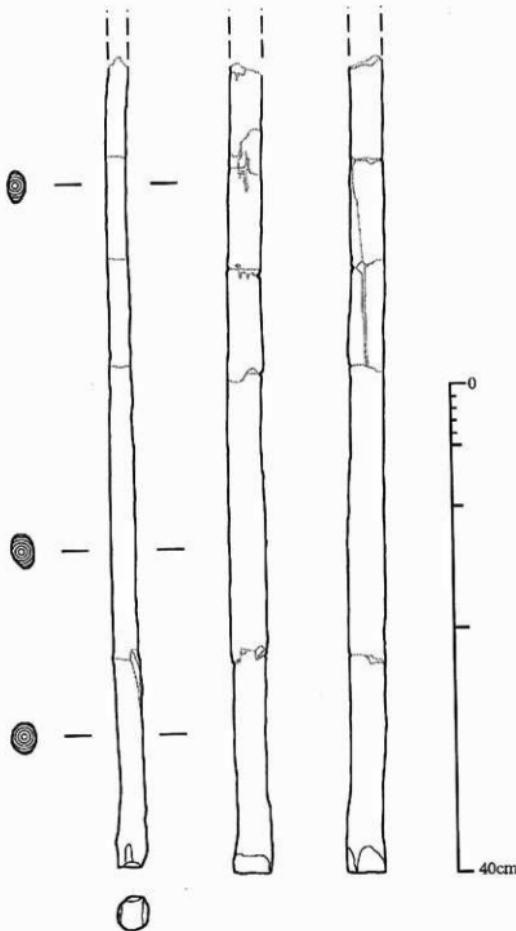


図13 北端部第II層中出土柄状木器(S=1:4) 端を加工し握り部を作る。



図14 調査区北部第VIII層下面(北から)
中央の窪みが溝3。奥左(東)に土坑1が写る。

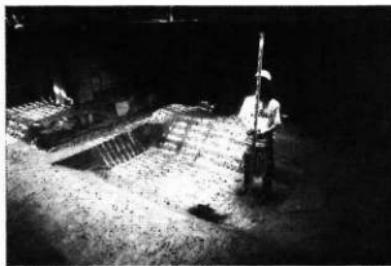


図15 第VIII層下面土坑1(南西から)
左の切られた鋼矢板より奥は第51次調査区。

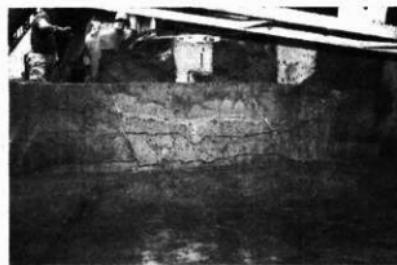


図16 第VIII層下面土坑1断面(南から)



図17 第VIII層下面土坑2(北東から)
左の板は調査区南端。土坑2は厚く残した土層
観察用の畦内で検出した。右の傾斜は土層断面。

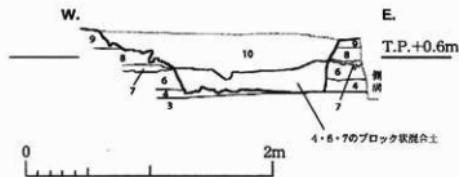


図18 土坑1断面図(S=1:40)
図中の数字は図8と同じ。

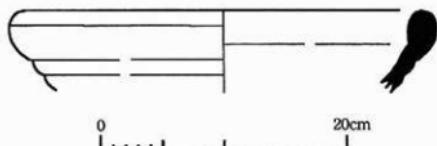


図19 溝3出土土器実測図(S=1:4) 口径は不確実。



図20 溝3出土土器(S=1:2)

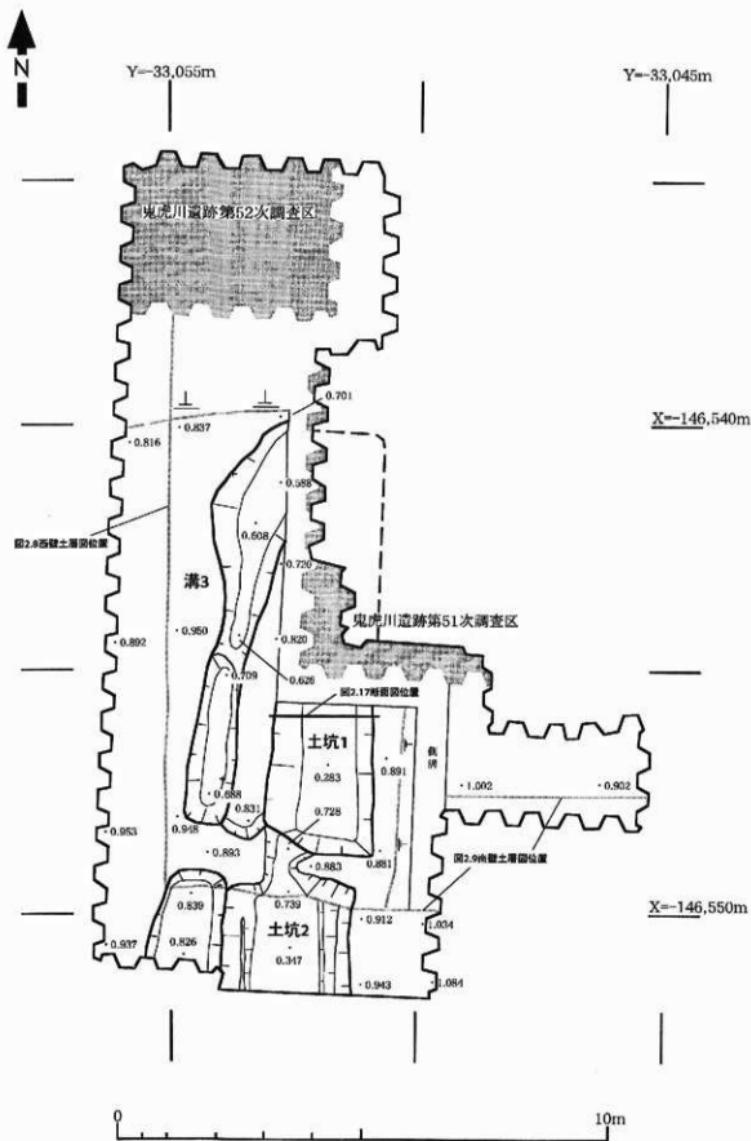


図21 第VIII層下面遺構平面図(S=1:100)



図22 第IX層中の遺構検出状況(北西から)

調査区北部で黒色粘土ブロックが混じる地層を精査している状況。



図23 第1回検出面溝1東部の杭(南西から)

調査区北端東部。人物の左足付近より左(西)は擾乱(52次4工区の調査区)。



図24 溝2東半の土層断面(北から)

層～第II層がブロック状に混合して堆積していた。遺物は若干の弥生土器細片が出土した。

なお、平面図では両上坑がつながるように見えるが、これは第VIII層の堆積中に没食されたものと思われる。

溝3は座標北から東へ約11°30'振る方位をとる。幅140～70cm、深さ20～5cmを測り、長さ約11mを検出した。南北とも調査区外にのび、端を検出していない。なお、北部で幅が広がっているのは51次とその後の工事による部分的な地盤沈下によるものである。埋土は第VIII層のみで、1点の須恵器鉢の口縁部小片(図19・20)が出土した。須恵器鉢は口径約16cmに復元したが、小片のため確実ではない。重ね焼きの痕跡が明瞭である。10世紀末頃のものと思われ、溝3の埋没時期を示すものではない。

これらの遺構は層序から鎌倉時代頃に埋没したと考えられる。

3.2 第IX層中の遺構(図22)

第IX層中(図8-12上面)で黒色粘土ブロックが混じった地層(図8-14)を発見した。この地層を遺構の埋土と考え、精査を繰り返したが、照明の不具合等もあり、平面で詳細に把握することはできなかった。おそらく、この遺構は溝状を呈し、座標北から東へ23°前後振る方位をとり、幅2.6m前後、深さ36cm前後を測るものと思われる。遺物は出土しなかった。

3.3 第1回検出面の遺構(図23～26)

機械掘削の終了後、層序に関係なく精査し、2条の溝を検出した。本来の面が失われていることから第1回検出面と呼称する。

溝1

溝1は調査区北端で検出した東西方向の溝で、52次第4工区で検出された溝4の南半部である。幅3.2m以上、深さ1.2m以上を測り、長さ約5mを検出した。東西とも調査区外にのび、端を検出していない。溝内には多数の径10cm以下を測る杭が打ち込まれていた。埋土からは若干の土師器皿微細片や瓦器碗微細片、土師器壺微細片等が出土した。他に、本来は埋土中にあったものが鋼矢板によって第VII層まで押し込まれたと思われる状態で出土した、1点の馬骨がある。

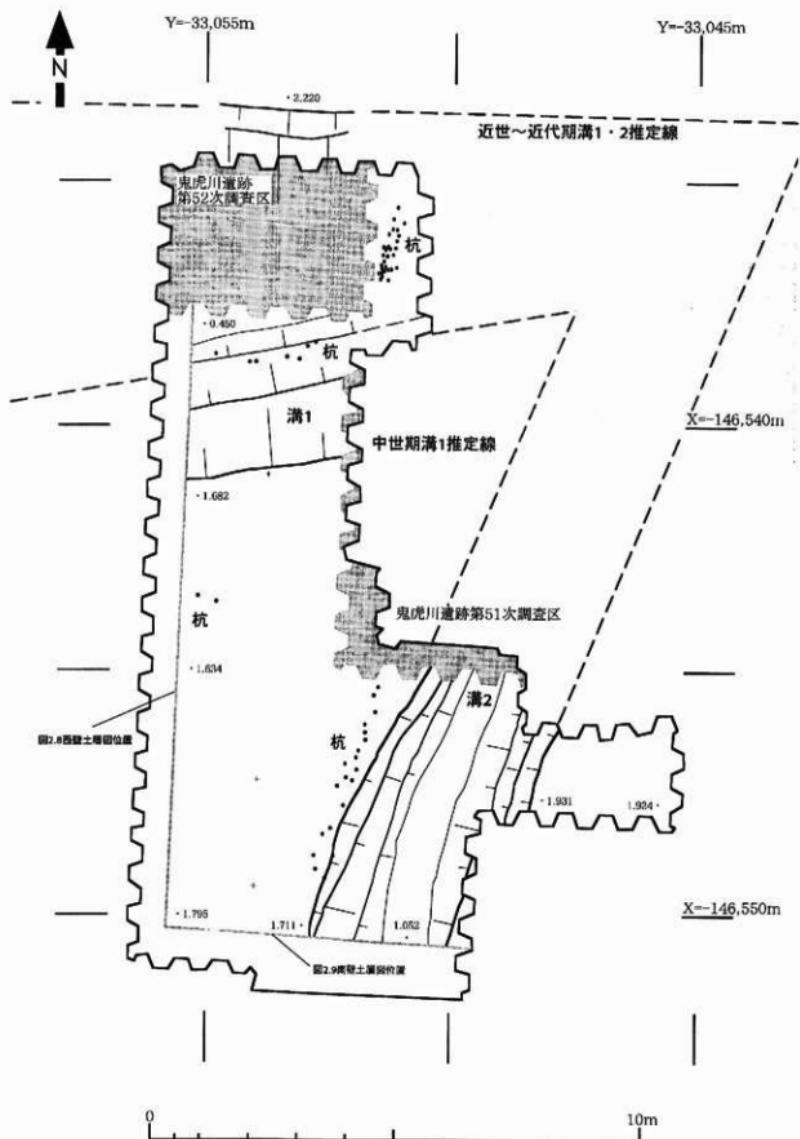


図25 第1回検出面遺構平面図(S=1:100)



図26 第1回検出面溝1出土遺物

1は馬右堀（とう）骨(S ≈ 1:2)。

解体痕が観察され、骨髄を取っていると思われる。残存長約23.6cm。

2は木製品(S ≈ 1:2)。

中央に方形の孔をあける。長さ約9.6cm。

3は瓦器碗底部細片(S ≈ 1:1)。

摩耗が著しく調整不明。

1

ところで、溝1は「中世期の溝を掘り返してつくられた掘り上げ田に伴う井路」(注6)とされている。今回の調査で検出した部分からは中世以降の遺物が出土していないことから、これは「中世期の溝」に相当する部分であり、溝内で検出した杭はこの「溝を掘り返してつくられた掘り上げ田に伴う井路」に伴うものと考えらる。南側の散在する杭は護岸のためのもので、東側に密集する杭は堰状の施設の一部と思われる。すると、「中世期の溝」の規模は幅約6.6m、深さ約1.6mを測り、「中世期の溝を掘り返してつくられた掘り上げ田に伴う井路」の規模は幅5.8m以上、深さ1.1m以上を測るものと考えられる。

今回の調査では確定できないが、52次の成果では溝1は13～14世紀頃に掘削され、掘り返し、19世紀頃まで機能していたとされている。

溝2

溝2は調査区南東部で検出した南北方向の溝で、51次で検出された「掘り上げ田に伴う溝」(注7)の続きである。座標北から東へ約23°振る方位をとる。幅3m以上、深さ80cm以上を測り、長さ約7mを検出した。南北とも調査区外にのび、端を検出していない。西肩には約20本の径10cm以下の杭がやや乱雑に打ち込まれていた。これは護岸のためと思われるが、東肩には見られなかった。埋土からは伊万里碗片や陶器ひょうそく片、巴文軒丸瓦細片、土師器火鉢片、須恵器細片、種子等が出土した。出土した遺物から溝2は18～19世紀頃に機能していたと考えられる。また、最下層から伊万里碗片が出土しており、溝2の掘削は18世紀頃を過らないと考えられる。

なお、溝2は近世～近代期の溝1と接続していたと考えられる。

第4章 おわりに

今回の発掘調査によって現地表面から約5m下の深さまでの地層を観察することができ、多くの資料を得ることができた。特に、これまでに行われた調査地周辺の発掘調査で遺構が確認されていなかった第VIII層下面で遺構を検出できたことは大きな成果である。

検出した遺構は2基の土坑と溝1条である。前項で土坑として記述した遺構は溝である可能性もある。溝と仮定すると、幅約2.2～2.6m、深さ約60cmを測る、座標に沿う方位をとる南北方向のものとなる。溝にはベースとなる第VII層を掘り残す部分があり、その部分は台形状の断面を呈し、上辺約50cm、下辺約140cmを測る。上辺には幅約70cm、深さ約15cmを測る不整形な溝が存在する。この台形の部分は溝に深さ約45cmの水を溜める堰と思われる。また、一人の人間が通行可能であることから橋としても機能していたと思われる。しかし、今回の調査ではごく一部を検出したにすぎず、この遺構が溝であるかは確定できない。現段階では土坑としておきたい。

ところで、この遺構は座標に沿う方位をとり、条里に規制された可能性が高いことが注目される。時期を決定できる遺物が出土していないが、層序から遺構は12世紀頃～13世紀前半頃に掘削されたと思われる。瀬戸哲也氏は13～14世紀頃に掘削される東西方向の溝が検出されている点などから「鬼虎川遺跡周辺では13世紀以降に現行条里に沿った地割りが設定される」としている(注8)。今回の調査で検出した遺構が溝であれば、氏の見解をやや修整する資料となろうが、類例の増加を待ちたい。

注

1 これまでの鬼虎川遺跡の発掘調査については概要を記した一覧表が下記文献に掲載されているので参照されたい。

菅原卓太・若松博恵・織山まり・松田留美・瀬戸哲也・鳥田拓也『一般国道170号線西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第52次発掘調査報告』2002 東大阪市教育委員会

2 東朋子「第8章鬼虎川遺跡の第51次調査」[東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告・平成12年度] 2001 東大阪市教育委員会 27～33項

以下51次とする。

3 注1文献と同じ。以下52次とする。

4 鬼虎川遺跡第52次発掘調査は3A工区・3B工区・4工区・5工区の4地区に分かれており、今回の調査区と重複する地区は4工区である。このため本節では52次4工区と明記する。

5 注2文献では「調査地の南西で落ち込みを確認した」という記述と「落ち込み(南西部)」とキャプションを付した写真が掲載されている。検出した層位の記述等は無い。ここでは遺構の形状から同一のものと判断し、規模は写真から計測した。

6 注1文献36項

7 注2文献28項

8 注1文献109項

文献

- 才原金弘・松田順一郎・中村友博・鳩倉巳三郎『鬼虎川遺跡第1～3次発掘調査報告』1990財団法人東大阪市文化財協会
- 才原金弘「車展示場建設に伴う鬼虎川遺跡試掘調査」『東大阪市遺跡保護調査会ニュース』No.9 1977 東大阪市遺跡保護調査会
- 宮崎泰史・別所秀高・木下亘『鬼虎川遺跡第22次調査概要報告-東大阪市西石切町所在-』2002 大阪府教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会
- 松田順一郎『鬼虎川遺跡北部の歴史時代耕作跡と地震層序-国道170号線被覆用地前交差点立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第38次発掘調査報告-』1997 財団法人東大阪市文化財協会
- 金村浩一『鬼虎川遺跡第41次発掘調査報告』2002 財団法人東大阪市文化財協会
- 池崎智詞『鬼虎川遺跡第42次発掘調査報告-国道170号線他鬼虎川遺跡第42次発掘調査報告書-』2000 財団法人東大阪市文化財協会
- 松田順一郎『鬼虎川遺跡北部の中・近世耕作地跡-浄化槽埋設に伴う鬼虎川遺跡第43次発掘調査報告書-』2000 財団法人東大阪市文化財協会
- 東朋子『第8章鬼虎川遺跡の第51次調査』『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告-平成12年度-』2001 東大阪市教育委員会
- 菅原章太・若松博恵・鶴山まり・松田留美・瀬戸哲也・島田拓也『一般国道170号線西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第52次発掘調査報告』2002 東大阪市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	きとらがわいせきだい 54 じはくつちょうさほうこく
書名	鬼虎川遺跡第54次発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	金村浩一
編集機関	財団法人東大阪市文化財協会
発行機関	財団法人東大阪市文化財協会
作成法人ID	42710
郵便番号	577-0843
電話番号	06-6736-0346
住所	大阪府東大阪市荒川3丁目28-21
発行年月日	2004.03.31
ふりがな	きとらがわいせき
遺跡名	鬼虎川遺跡
ふりがな	おおさかふひがしおおさかしにしいしきりちょうめ 289～523 ばんち
遺跡所在地	大阪府東大阪市西石切町5丁目289～523番地
コード	市町村 27227 遺跡番号 不明
北緯	34° 40' 42" (旧測地系)
東經	135° 38' 21" (旧測地系)
調査期間	2002.05.30～07.17
調査面積	約 98 m ²
調査原因	電気施設設置
種別	集落
主な時代	弥生/中世/近世
遺跡概要	弥生～弥生土器+木器/中世-溝-土師器+須恵器+瓦器+馬骨/近世-溝-土師器+陶磁器+軒丸瓦
特記事項	特記なし

鬼虎川遺跡第54次発掘調査報告

2004年3月31日

発行 財団法人東大阪市文化財協会

〒577-0843 大阪府東大阪市荒川3丁目28-21 TEL.06-6736-0346

印刷 株式会社ダイニチ

〒553-0003 大阪府大阪市福島区福島7丁目17番9号 TEL.06-6451-4133

紙質 表紙 上質 135 Kg 本文 ニューエイジ 57.5 Kg

製本 無線綴じ

The 54th Excavation Report of
Kitoragawa Site,
Higashi-osaka City, Osaka Pref., Japan.

2004年3月

March 2004
Higashi-osaka City Cultural Heritage Association